

<第2号（1979年6月）目次>

- 第1回日本オリンピック・アカデミー（JOA）セッション開かる （p.1）
第1回セッションのあらまし （p.2）
PhilosophyとRelationを JOC岡野総務主事JOAセッションに訴える （p.3）
オッター・シミチェック氏（IOA会長）JOAセッション開催に祝辞 （p.4）
- 1979年第19次IOCセッション参加者 （p.5）
*IOAセッションの誤記と思われる
雑報 （p.5）
- ペトロス君のこと 佐々木秀幸 （pp.6-8）
- 事務局だより （p.9）
ジョア JOA じょあとは何ぞや？ （p.10）

JOA TIMES

Japan Olympic Academy

第1回 日本オリンピック・

アカデミー (JOA) セッション開かる。

3月19日、日本オリンピック・アカデミー、(JOA)及び日本オリンピック委員会(JOC)の主催、国際オリンピック・アカデミー(IOA)の後援のもとに、かねてより各関係機関から期待されていた「第1回日本オリンピック・アカデミー・セッション」が、岸記念体育会館地下3階講堂にて開催され、成功のうちに終了した。

まずJOAのPRを

第1回JOAセッションは成功のうちに終了することができた。しかし必ずしも盛会であったとはいえない。学生諸君の参加が多かったことは、この会の将来に期待が持たれることはたしかであろうが、一般参加者がもうひと息というところであった。

ところでJOAの結成はかなり突発的であったかのように外部から眺められているふしがある。しかし、日本からのIOAへの参加を歴史的にふりかえてみると、1961年第1回大会から、現在まで1回たりとも抜けることなく代表を送っていることがわかる。いわゆる老舗である。それを考えれば、しごく当然の如くJOAが結成されたとみてよい。いやむしろ遅すぎたのかも知れない。

オリンピックという華やかな、しかも荘厳な、地球人のほこりとする一大祭典を今後どのようにけがれなく、正しく継承させていくかを見守っていき、時には矯正のための影響力を与えようとする、あたかも芝居の黒衣(くろご)のように、緑の下の力持ち的な存在となって活動していく、いわば非常に地味なJOAをどのように多くの心ある友人たちに理解され、支持されていかなければならないか。

ダイレクトにいったまえば、いかに多くの会員——しかも一騎当千——を得るかが先決であり、そのためには一大PR運動を展開していくことが当面の第一義的な解決策となろう。(S)